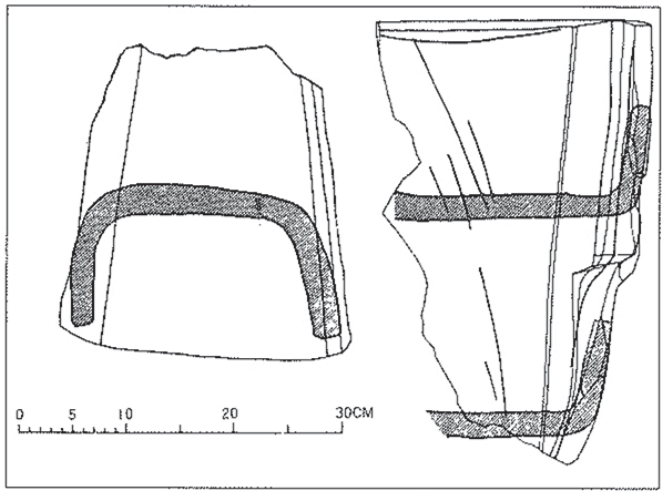
近江の古瓦 Ⅷ 大津 2

大津の２として南滋賀廃寺出土の瓦について述べますが、この廃寺の瓦はその種類が多いので、ここでは白鳳・奈良時代のものに限り、平安時代のものは、錦織各地出土の瓦と一括して次回に述べることとします。なお、寺院跡の西に接して、この廃寺の瓦を焼いた榿木原瓦窯がありますが、この瓦窯出土瓦は南滋賀廃寺に含めることとします。

南滋賀廃寺はこれまでの大津宮調査に関連して、あるいは延暦５(786)年に桓武天皇が建立された梵釈寺の跡と考えられたこともあり、大津宮の跡が寺院となったのではと推測されたこともありました。しかし、現在では大津宮と同時代に存在し、その後平安時代まで続いた寺院であるとして、南滋賀廃寺の名でよばれています。そして、その伽藍配置や堂塔の規模も、その大要が確定されており、白鳳時代の寺院遺構を述べる際には、度々その例としてあげられています。また、この寺院跡出土の瓦には極めて特殊なものがあり、瓦の歴史からも特筆されるべき遺跡です。



方形筒瓦及び平瓦の実測図
榿木原瓦窯調査報告より

この寺院出土瓦のうち、全国に例を見ないものに方形の瓦があります。その軒先瓦は、瓦当面の一辺約24～25cm前後の方形に近いものと(１．２)、約38cm×約６cmの無文の長方形を折りまげたような平瓦(21)の組合わせで構成されています。それに方形の筒瓦と耳が直角に折れた平らな平瓦がつづきます。この筒瓦と平瓦はその実測図を図示しました。この方形軒先瓦の文様は、最初「さそり」等の虫類のデザインと疑われたこともありましたが、現在では蓮の花を特殊な観点から見たデザインであることが定説となっています。しかしこのような経緯で「さそり瓦」の俗称でよばれることもあります。この蓮弁は蓮子を表わさないものが大部分ですが(１)、蓮子を表わしたものが少量含まれています(２)。この相違が何を示すのかはよくわかりませんが、あるいは蓮子のあるものは普通の屋根瓦ではないのかもしれません。さらにこの寺院跡出土の子葉を持たない軒丸瓦の中に、その筒部が方形になっているものがあります(３)。これは瓦当面が円形でありながら方形瓦と同様の使われ方をしたことを示すもので、ここにも特殊な様子がうかがわれます。この外、弁の形が「かぶら」のような形をしたもの(４)、弁と子葉のあり方の特殊なもの(５)、弁の輪郭だけのもの(６)など、他にあまり例を見ない軒丸瓦があります。また、無子葉で弁の中央に稜線をもつものがありますが、これにはその外縁が無文のもの(７)、粗い輻線文のもの(８)、細かい輻線文のもの(９)がありますが、これらは他の寺院跡にも見られます。

この寺院跡で出土量の多いものは、所謂川

1986．３．31
財団法人　滋賀県文化財保護協会

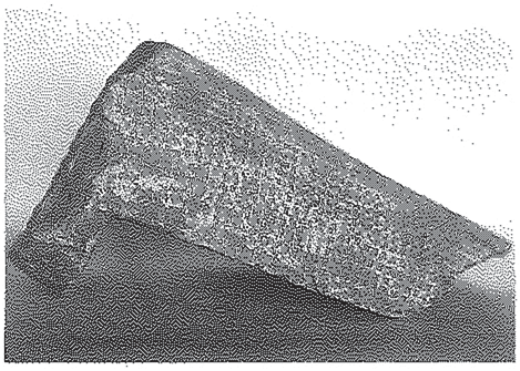
原寺式とよばれる複弁の軒丸瓦と重孤文の軒平瓦で、これが主流のようです。ところがこの複弁軒丸瓦の大部分は、その作り方がこれまた他に例を見ないものです。その一つは、瓦当裏面に布目をもった絞り痕が見られることで、もう一つは、その筒部をはじめあらゆる面に格子目の叩き文があることです。これらは写真でその有様を示しておきました。この種の瓦には、蓮子が１＋５＋９のように多いものと(10～13)、１＋８と蓮子が少ないものの（15～17）２種があり、それぞれが更に幾つかの種類に分かれるようです。ここでは総てを示すことができませんので、そのうちのいくつかを示しておきました。なお、崇福寺跡でも出土していますが、川原寺跡出土のものと同笵と思われるものが(12)少量ながら発見されています。また、中心伽藍区域からやや離れたところで、裏面に布目や絞り痕のないものが出土しています(13)。このようにこの寺院跡の瓦には注目すべきいくつかの点があります。軒平瓦の重弧文は、四重孤のものと(22)、三重孤のものの(23)２種類のようです。その外、同じく複弁系ですが、周縁の文様が鋸歯文でなく輻線文のものがあります(14)。これは崇福寺跡にも見られます。

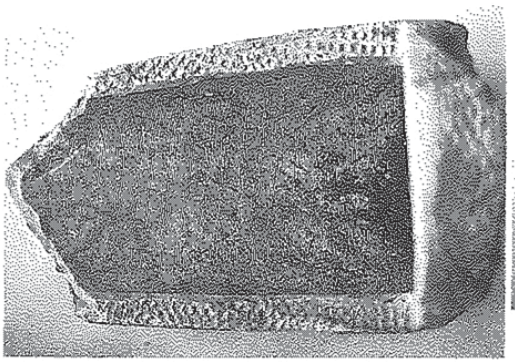
奈良時代の瓦としては、平城京跡などにも見られる瓦が出土しています。軒丸瓦は複弁８葉ですが、その蓮弁の姿は単弁16葉と間違いかねないもので、中房は比較的大きく、蓮子は１＋８です。弁の外側には２重の圏線がめぐり、周縁には鋸歯文が見られます(19)。これに対する軒平瓦は均斉唐草文のもので、内区の文様は垂下する中心飾りからやや直線的な唐草が３転しています(24)。この内区の上下に２本の条線があり、前述の軒丸瓦と対をなすことを示しています。また、単弁16葉の内区と、８個の飛雲をめぐらす外区からなる軒丸瓦と(20)、中心に向って左右各３個の飛雲をえがいた軒平瓦(25)の対があり、このような飛雲文の軒瓦は、此処と大津市南部の瀬田・石山地域にだけ見られる特殊なものです。

この外、ただ一片だけ榿木原瓦窯で発見された所謂藤原宮式の軒丸瓦片がありますが、これは寺院跡では発見されておらず、果してこの寺院に使用された瓦かどうか疑問とすべきものです(18)。

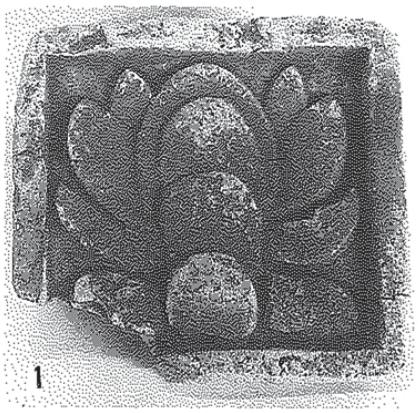
前述の飛雲文軒瓦には、同じく蓮弁の周囲に飛雲文をめぐらし、その下に樹木を描いた鬼瓦がともなっています(26)。この地出土の鬼瓦には、飛雲文のほかに、鬼面文と思われる破片が寺院跡から出土しており(27)、また榿木原瓦窯の調査で、従来知られていなかったものが発見されています(28)。ただし、これらについてはその完形を複原するまでには至らず、その詳細には不明の点があります。

（西田　弘氏提供）





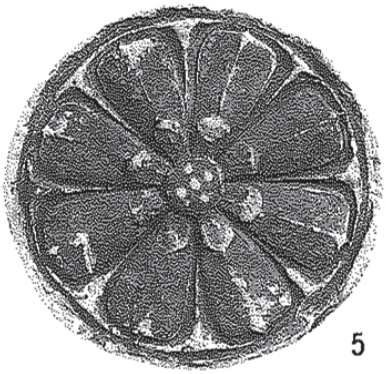
複弁８葉軒丸瓦のたたき文や絞り痕

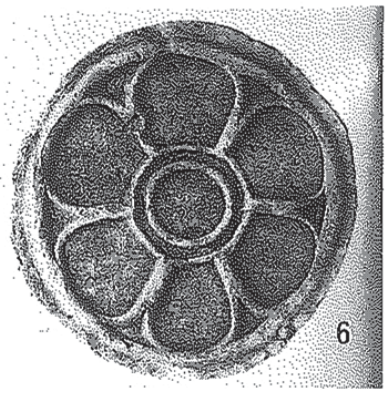

1

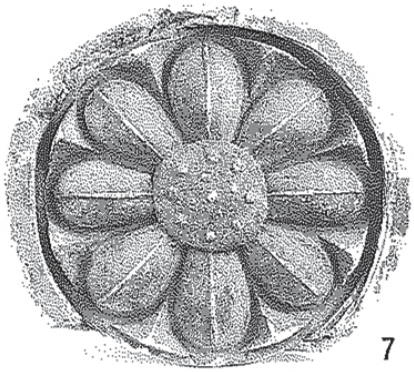
2

3

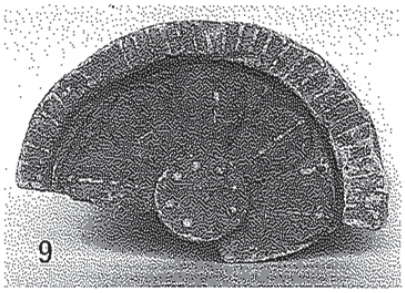
4


5


6


7

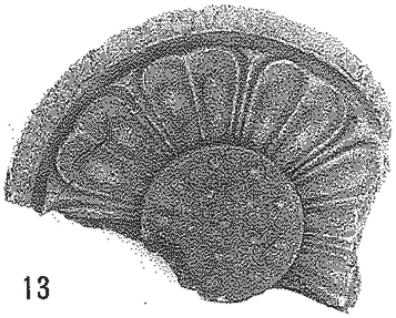
8

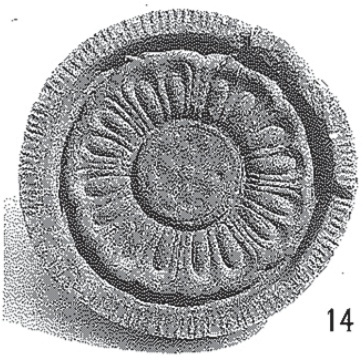

9

10

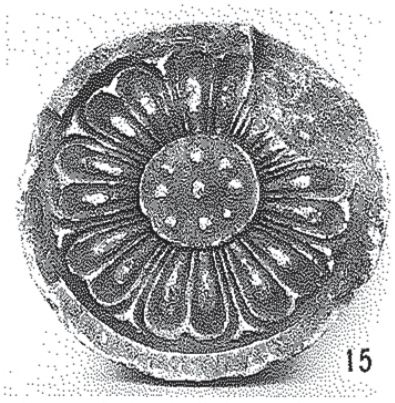
11

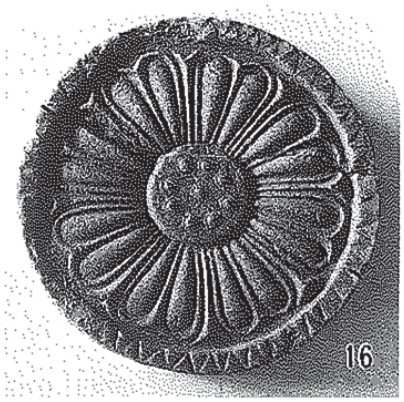
12


13

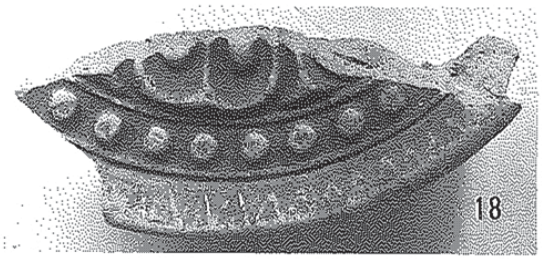

14

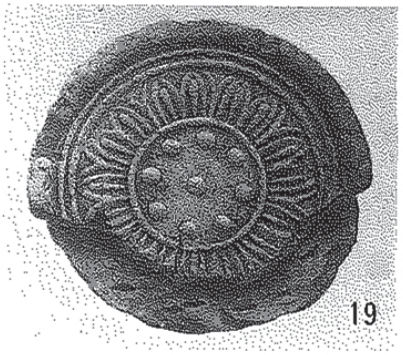
3、4、5、7、26　寿福 滋氏写真
10　山本湖舟氏写真
6、19　県報告第9冊より


15

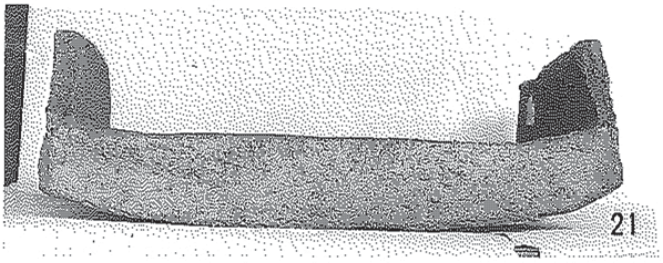

16

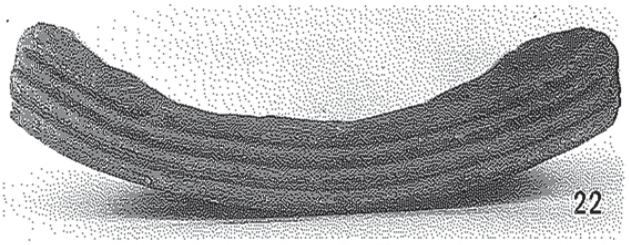
17

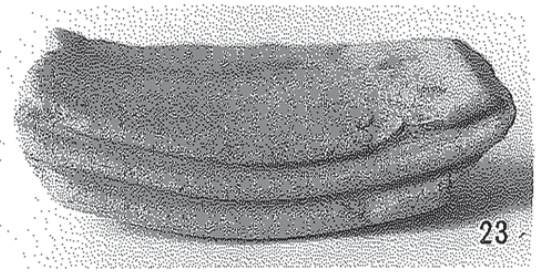

18

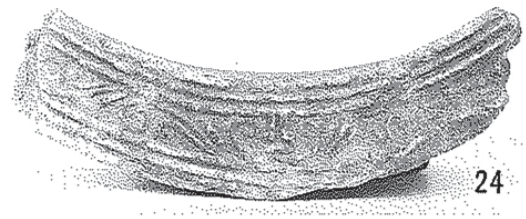

19

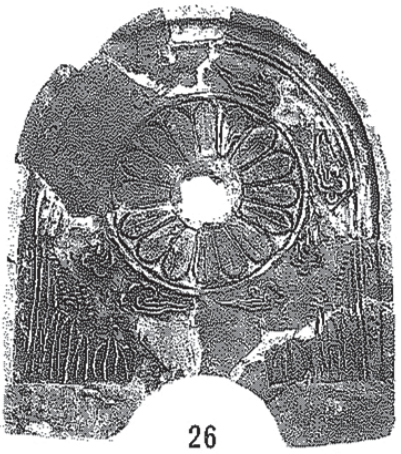
20


21

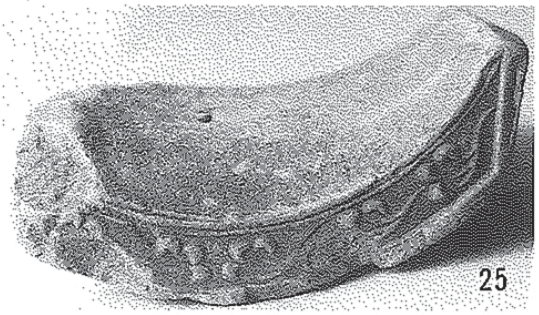

22


23

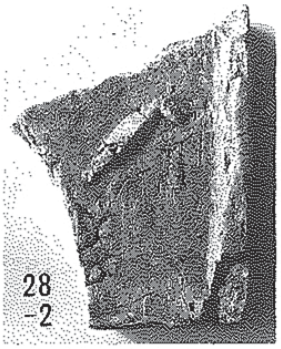

24


26

27


25

28-1


28
-2